

(2) 介護等体験を終えて 〈5〉

自分から話しかけるなかで 笑顔を支えあえる関係が生れる

国際文化学部 3年 U.T

私が介護等体験で学んだことは、2つあります。1つ目は、コミュニケーションをとる時は、相手の目を見て、言いたいことを明確に伝えようと努力すること。2つ目は、「老人」「障がい者」といった括りを取り払えば、違った視点で相手と触れ合えるのではと考えられるようになったことです。

お年寄りの方との触れ合いは私にとってあまり日常的なことではなく、耳が聴こえづらい人や動きの少ない方、席に座らずに徘徊している方、様々な人とどのように接すればいいのか最初はわかりませんでした。老人ホームの職員の方に、しゃがんで、相手の目をよく見て、大きな声ではっきりと話すこと、相手の言っていることが聴きとれなかったら、訊き返すこと、というアドバイスを頂き、実践してみることにしました。最初はやはり緊張するのですが、お茶をいれて、運びに行くと、「ありがとう」と言ってくれました。少し安心して別の人に「お茶をどうぞ」と目を合せてはっきり喋ると、笑顔を返してくれました。あまり体を動かさない方にも、「お茶のおかわりを召し上がりますか」とゆっくり話しかけると、首を振って返してくれました。こちらが、わかりやすいように話しかければ、相手も応えてくれることが体感できました。

2つ目の点についてですが、私は特別支援学校で実習するまで、何となく「障がい者」という1つのカテゴリーでしか見ていませんでした。教室に行ってみてまず初めに思ったのは1人ひとり違う、ということでした。じ

っと椅子に座っている子もいれば、常にうろうろしている子、おもしろいをしてしまう子、と様々でした。勿論、自閉症についての初歩的な知識は頭には入っていましたが、やはり実際にその症状を目の前にすると全く動転してしまいました。しかし、一緒に授業や活動に参加するうちに、子ども達の個性が垣間見えてきて、面白いと感じるようになりました。車やCMが好きで、よく社名やキャッチフレーズを口ずさんでいる子、勉強の途中で全問正解した喜びを全身で表現する子、子どもによってキャラクターがいろいろあって、出来ること出来ないこと、興味のあることないこと、1人ひとりばらばらなところは、普通の子と変わらないのだと思いました。そして、何より、元気な多動の子というように、障がいを通り越して、1つのアイデンティティとなっていることに気付かされました。担任の先生から薬の強力な作用によって、もし多動の症状だけでなく子どもの元気までも奪われてしまったら、もはやその子ではないのではないかという話を伺い、それまでただ単に「障がいとは可哀想なもの、なくなればいいもの」という考えもどこかにあった自分は、改めて「障がい」という括りを取り払うということについて考えさせられました。

この体験を通して、自分とは違う日常を送っている人達のことを、今までは無関係だとばかり思っていました。少しリアリティを持って、どこかで深く繋がっているのだと思えるようになりました。